EPSON
EXCEED YOUR VISION

京都の文化遺産を内装デザイン、インテリアへ
京都祇園下河原「天界」に見る新しい可能性

京都らしい風情あるたたずまいと四季折々の心づくしの手料理、そしてその素晴らしいインテリアで話題となっている店、「京都祇園下河原 天界」。かつて旅館を営んでいたという町家作りの建物を活かした設計もさることながら、その空間で展開されている迫力ある尾形光琳の風神雷神図など、ほかにはない内装デザインに、初めて訪れた人は誰もが一瞬息をのむ。そして感嘆の声を上げずにはいられない。

それらの変幻自在な内装をかなえているのが、エプソンの大判プリンタマックスアートPX-9500だという。

この店を企画し、運営している株式会社エニアックインターナショナル代表の松川恵一氏に話をうかがった。

クリエーターが集う店から新しい発想が生まれた

大判プリンタを活用して内装デザインに活かすという発想は、一体どこから生まれたのか。

その話をするには、まずは店舗設計を手掛けている株式会社エニアックインターナショナル（エニアック）のプロフィールが大きなポイントになる。

「もともとは店舗設計やプランニング、内装デザインなどを手掛ける会社です。クライアントからの依頼で仕事をこなしていくうちに、100％自分たちの考える飲食店という空間を具現化し、プロデュースしてみたいという欲求にかられ、16年前に店舗経営も始めました」と松川氏。

最初に開いたのは、同じく祇園にあるわずか6坪、9席というショットバー。その名も『コペルニクス的展開』。小さい空間ながらクリエイティブな要素がちりばめられたバーは、多くの客を引きつけ、クリエーターたちが集った。

「才能ある人と人が集まって、そこから何かが生まれてくる。そんな場になっていきました。ショットバーは自分たちの想いを広げていくための、一つのメディアのようなものでしたね」。

そして人が集まれば、さらに新しい発想が生まれ、エニアックは和食の店（現『京都祇園下河原 天界』）、イタリアンの店、カフェへと業態を変えながら、次々と自社経営による話題の飲食店を誕生させていった。

「料理は趣味として好きですが、飲食業は全くの素人でした。でも自分たちの想いを具現化していきながら思ったのは、お客様に『ありがとう。また来ます』と言ってもらえる飲食業という仕事は、なんていい仕事だろうということ。そしてまね事ではない自分たちのポリシーのある店作りは奥深く、やりがいのある仕事。面白いですね」。

『京都祇園下河原 天界』 http://r.gnavi.co.jp/c098900/

マックスアートPX-9500でMCマット合成紙にプリントして作られた屏風。説明されないとプリント出力とは気付かないほどのクオリティ。

（株）エニアックインターナショナル
代表 松川恵一氏

『マックスアート』が拓いたかつてないインテリア手法とは

そんなエニアックが、エプソンの大判プリンタ『マックスアート』と出会い、その創造性はさらなるステージへと進化した。

「それまではパースやポスターなど、ごく当たり前の使い方でした。でもマックスアートはロール状になった用紙、そして布にもプリントできる。以前にテキスタイルの仕事を手掛けていたこともあり、ロールになった布、ファブリックから様々なものが生みだされるように、これは今までにない可能性があるのではないか、とひらめいたわけです」。

そしていろいろ試していく中で、尾形光琳の風神雷神図などの文化遺産に対して使用権料を払い、ふすま絵や壁紙などに展開することを思いついたという。クリエーターとしての豊かな創造力が生んだ、まさに発想の転換だった。

「ふすまの裏表に、全く違った国宝の絵図をデザインすることもできるわけです。誰もが面白いですねぇ、と喜んでくれます。これまで文化遺産のデジタル化は、アーカイブという視点でのみ取り上げられてきました。でも保存するだけではなく、それを現代生活において新しいものに昇華させ、活かしていきたいと考えたのです」。

コストは従来の10分の1以下いつも鮮度のいいインテリアに

そんなクリエーターの想いが、マックスアートの見事な色の再現力、筆使いや紙の質感まで伝わる表現力などによってかなえられ、さらなる発展を遂げようとしている。

「この方法でいけば、各店舗で独自のインテリアが、従来の10分の1以下のコストでもできるようになる。それなら四季折々に、自在に店内のインテリアを変えたりすることも可能でしょう。また布にもプリントできるので壁紙とソファのファブリックを同じデザインで統一したり、ユニフォームの一部に取り入れることもでき、可能性はまだまだ広がります。できれば店内のすべてをこの手法でデザインした飲食店を作り、季節ごとにいつでも新鮮な気持ちでお客様に楽しんでいただきたい。そんな企画も考えているところです」。

もちろんプリントがいくら精巧でもそれだけでは、客を感動させ、引きつける魅力にはならない。「いかに本物の持つ存在感を与えるか。その演出方法も大きなポイントなのです。照明の当て方、他のしつらえの組み合せ方、本物のアンティークとの取り合わせなどがあってこそ、『天界』のような空間ができあがるのです」。

エプソンの大判プリンタ マックスアートとエニアックによって、これからどんな食の空間が出現するか。実に楽しみだ。

世界に誇る、日本独自のインテリア手法に

京都には、多くの文化遺産が残され、また建具職人などの匠の技も現代に伝承されている。「文化遺産と職人技、現代感覚の融合により、世界に向けて発信できる、日本ならではの素晴らしいインテリア手法になると思います。しっかりと育て上げていきたいですね」。折しも世界は和食ブーム。エニアックによるインテリア手法が、さらなる日本食ブームの起爆剤となるかもしれない。

*A、Bの屏風、Cののれんもマックスアートで作成されたもの。
A・B『京都祇園下河原 天界』の一室。尾形光琳の竹梅図屏風をふすま絵に仕立ててある。襖の桟や船底天井のラインとも相まって、美しい空間に。そして何よりそれらを灯明のような光の照明で照らし出すことで、タイムトリップしたような幽玄な世界が満ちている。C 入口に掛かるのれんもまた、竹梅図屏風の一部をあしらったもの。布にプリントできるからこその使い方。これなら気軽にのれんを使い分けられる。

制作フロー「風神雷神図を襖絵に加工する」

EPSON
EXCEED YOUR VISION
それはアートが渇望した色彩表現力。

デジタルプリントのあらゆるニーズに応える
MAXART K3 ハイクオリティモデル

D スキャニングした風神雷神図を、襖にどのように配置するかなど、その大きさや位置などをいろいろと検討し、パソコン上でデザインしていく。ソフトが充実しているので、操作性がよく、いたってカンタン。自分のイメージを自在に再現できると、スタッフからも好評だ。E パソコンからのデータを受けて、マックスアートPX-9500が作動。筆使いや紙の質感までが伝わる、見事なプリントを出力中。音はいたって静かで、気になるプリントスピードは、驚くほど早かった。